

現代中国語の結果複合動詞形成 語彙的事象構造の立場から

王 怡 人

Abstract

The present thesis aims to investigate the formation of the resultative compound verbs in Modern Mandarin. The resultative compound verbs show CAUSE and BECOME in their semantic meanings, even their component verbs do not have the meanings in them. The recent studies have tried hard to find how CAUSE originates in terms of the component verbs. To resolve this puzzle, I will make a crucial use of the lexical event structure templates by Rappaport Hovav & Levin (1996, 1998). And based on one of the lexical conceptual structures, the arguments of the resultative compound verbs can be interpreted.

キーワード……結果複合動詞 使役 語彙的事象構造 語彙概念構造

0. はじめに

結果複合動詞 (resultative compound verbs) とは、(1) のように、原因を表す前項動詞と結果を表す後項動詞¹⁾を組み合わせたものである。そして後項動詞が表す事象は前項動詞の表す事象が原因となって発生する。本稿では、現代中国語の結果複合動詞が形成する際に生じる使役義 (causative) について、語彙的事象構造 (Lexical Event Structure) の立場から探ってみる。また、現代中国語の結果複合動詞の意味内容を、語彙概念構造 (Lexical Conceptual Structure; LCS) によって分析してみたい。

- (1) a. 哥哥**逗笑**了弟弟。(兄さんが弟をあやして、弟が笑った)
b. 黛玉**哭走**了客人。(黛玉が泣いて客が去っていった)
c. 小明**打死**了蚊子。(小明は蚊を叩いて、蚊が死んだ)
d. 孩子**冻病**了。(子どもが凍えて病気になった)

1. 先行研究と問題点

従来、現代中国語の結果複合動詞についての研究については、さまざまな視点から数多くの

研究がなされてきた。本章では、使役義の発生について、湯(1990)と石村(2000)を取り上げ、具体例を見ながら紹介する。

1.1 後項動詞の能格性の顕在化

湯(1990)では、「述補式複合動詞」(verb-complement compound verb)を、その内部構造と外部機能から、「述補式**使動・及物**複合動詞」、「述補式**及物**複合動詞」、「述補式**不及物**複合動詞」、「述補式**兼語及物**動詞」²⁾に分けている。このうち、本稿の「結果複合動詞」に相当するものは「述補式**使動・及物**複合動詞」であると考えられる³⁾。そして、「述補式**使動・及物**複合動詞」には、さらに次の3つの下位分類がある。

(2) Vt + 能格動詞(ergative verb) 使動動詞(causative verb)

- a. 他**推開**了窗戶。(彼は窓を押し開けた)
- b. 打開(開ける)、打破(割る)、打倒(倒す)、搖動(揺らす)、叫醒(起こす)、説服(説得する)、灌醉(酔わせる)。

(3) Vt + 能格用法の形容詞 使動動詞

- a. 這種食物可以**降低**血壓。(この食べ物には血圧を下げるができる)
- b. 擴大(拡張する)、縮小(縮める)、升高(高める)、改善(改善する)、澄清(明らかにする)、漂白(漂白する)、摔壞(落として壊す)。

(4) Vi + 能格用法の自動詞もしくは形容詞 使動動詞

- a. 她**哭濕**了手帕。(彼女は泣いてハンカチを濡らした)
- b. 跌斷(転んで(足が)折れる)、喊啞(叫んで(喉が)かれる)、累壞(疲れる)、氣死(怒る)。

(2) ~ (4) に共通しているのは、後項要素の「能格性」(ergativity)ということである。湯(1990:164)によれば、能格動詞の統語的属性には「使動・及物(causative-transitive)と起動・不及物(inchoative-intransitive)」が含まれる。例に挙げた(2) ~ (4)の後項要素は、現代中国語では「使動用法」を持たないが、古代漢語では決して珍しいものではない⁴⁾。これらの複合動詞は、後項動詞の「能格化」、文の「合併」(merger)そして動詞の「再分析」(reanalysis)というプロセスを経て生成される。例えば(2a)の「推開」(押し開ける)の形成プロセスは、(5)のように符号化することができる。

- (5) a. $NP_i \text{ Vt } NP_j [NP_j \{Vi/A\}]$
 ↓ 述語の能格化
 b. $NP_i \text{ Vt } NP_j [(\{Vi/A\} >) \text{ Ve } NP_j]$
 ↓ 文の合併と動詞の再分析
 c. $NP_i [\text{v } \text{ Vt } \text{ Ve } NP_j]$ (湯 1990:163 より)

(2a) は (5a) のような「 $NP_i \text{ Vt } NP_j$ 」という構造を持つ「他推窓戸」(彼は窓を押す)と、「 $NP_j \{Vi/A\}$ 」という構造を持つ「窓戸開」(窓が開く)の二つの文から合成されたものである。(5a) の後ろの文の述語(不及物動詞あるいは形容詞;ここでは「開」)が、「能格化」によって及物使動動詞 (Ve)⁵⁾ になり、(5b) の構造になる。そして、二つの文が合併し、さらに動詞が再分析され、(5c) のような構造に至る。動詞が再分析される際に発生した動詞の編入 (incorporation) は、(6) のように表示することができる。

- (6) $\begin{array}{c} \text{Ve} \\ \swarrow \quad \searrow \\ \text{'Vt} \quad \text{'Ve} \end{array}$ (湯 1990:160 より)

つまり、主要部である構成要素の能格動詞 ('Ve) の特性が複合動詞 (Ve) に浸透し、複合動詞全体が能格動詞になる。すなわち「使動・及物」用法と「起動・不及物」用法の両方を持っている。湯 (1990:166) は、中国語の述補式複合動詞の主な機能は、複合動詞を「使役用法」と「起動用法」をもつ「能格動詞」にさせることであるという。これを言い換えれば、本稿で考察する結果複合動詞に相当する述補式複合動詞の使役用法は、後項要素の特性から顕在化されたものだということになる。

しかしながら、述補式複合動詞の属性が、主要部である後項要素からのものであるということだけでは、前項要素と合成する理由を説明することができない。また、使役義は後項動詞本来の能格性からのものであるという解釈では、(7) のような例を説明できない。つまり、(7) のように、後項要素が能格性をもたない場合について、この解釈が成り立たない。

- (7) a. 黛玉**哭走**了客人。(黛玉が泣いたせいでお客さんが去った)
 b. 哥哥**逗笑**了弟弟。(兄さんが弟をあやして、弟が笑った)
 c. 老師**氣哭**了⁶⁾。(先生が怒って泣いた)

1.2 ヴォイス転換：後項動詞の他動化

石村 (2000) では、「結果を表す動補構造」(“VR” で表す) において、単独の述語として使役義を持たない前項要素 “V” と後項要素 “R” が複合化した後、使役他動詞と同じ意味機能が

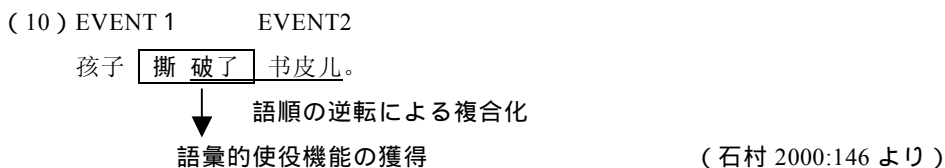
備わる原因について考察している。石村 (2000) は、使役の意味を柴谷 (1982) や影山 (1996) などに沿い、(8) のような構造をもっているとする。

(8) 使役の意味構造

原因事象		結果事象	
EVENT 1	CAUSE	EVENT2	(石村 2000:145 より)

例えば (9a) のような動補構造を持つ文は、(9b) のように、原因事象と結果事象からなるものである。しかし、原因事象と結果事象をそのまま合成させると、(9c) のような非文ができてしまう。そこで、結果事象の語順の変換が必要とされる。つまり、「书皮儿破了」を「破了书皮儿」に変えなければならない。このような一連の過程は (10) のように表示される。

- (9) a. 孩子**撕破了**书皮儿。⁷⁾ (子供が本の表紙を引き裂いた)
 b. 孩子**撕**书皮儿 CAUSE 书皮儿**破**了。
 c. * 孩子**撕**书皮儿**破**了。 (石村 2000:145 より)



そして (10) の生成プロセスと連動するのは、“R” のヴォイス転換ということである。一項述語である“R” は現代中国語では使役義を失っているため、そのまま他動詞に転換させることは不可能である。従って、使役義を獲得するため、その前に原因となる別の述語を導入しなければならない。

(11) “R” のヴォイス転換

後項述語の使役動詞化 (他動詞化) は前項述語の導入を受ける

$$y \quad R \quad x \quad VR \quad y$$

$$* x \quad R \quad y \quad [x \text{ は使役主 (原因主), } y \text{ は対象を示す}]$$

- (12) a. *他**断**了树枝。 他**折断**了树枝。(彼は枝を折った)
 b. *我**红**了头发。 我**染红**了头发。(私は髪の毛を赤く染めた)
 c. *他**干**净了杯子。 她**擦干净**了杯子。(彼女はコップをきれいに磨いた)
 (石村 2000:146 より)

(12)の矢印の左側の文の「断」「红」「干净」は、そのまま他動詞として使うことはできないが、その前にそれぞれ「折」「染」「擦」を加えると、複合動詞全体が二項動詞になり、正しい文になる。これにより、石村(2000)は、動詞を複合化の動機は、“R”がヴォイス転換することにあるとして、“VR”全体が使役義を獲得する理由を説明している。

この石村(2000)の「ヴォイス転換説」は、後項動詞が形容詞または非意図的な自動詞(非対格動詞)という一項述語でなければならないという基盤に立っている(石村(1999:146))。つまり、石村(1999,2000)では、望月(1990a,1990b)、山口(1991)、沈(1993)、秋山(1998)などと同様、結果複合動詞の後項要素から非能格動詞と他動詞が除外されている。しかし、結果複合動詞の後項動詞は(13)のように、非能格動詞も二項動詞も容認されている(Li(1990)、王(2004b)を参照)。また、後項動詞が非対格動詞の場合、本来の主語を深層構造の目的語位置に戻すことができるが、非能格動詞の場合には主語が移動できる根拠がない。さらに、後項動詞がもともと二項動詞の場合、ヴォイス転換の視点は適用できない。それゆえ、Li(1990)、王(2004b)の考察に依拠すれば、「ヴォイス転換説」は更なる検討の余地がある。

(13) a. 後項動詞が非能格動詞

哥哥**逗笑**了弟弟。(兄さんが弟をあやして、弟が笑った)(=7b)

b. 後項動詞が二項動詞

他**玩忘**了自己的職責。(彼は遊んで、自分の責任を忘れてしまった)

後項動詞を他動化するために前項動詞と複合するという石村(2000)の論述には、後項動詞の前に原因を表す事象を加えると、自然に使役義が生じるという前提がある。本稿の立場は基本的にこれと同じであるが、後項動詞の条件が異なっている。また、もし動詞を複合する理由が後項動詞を他動化するところにあるならば、そもそもなぜ後項動詞が他動化しなければならないかという本質的な問いについての考察も必要であろう。

現代中国語の結果複合動詞を全体的にとらえ、その形成を考えるために、以上の先行研究とは別の観点から、第2章では、前項動詞と後項動詞それぞれの本来の意味が合成されるだけでは使役義が生じないことを論じ、語彙的事象構造の基本型から使役義の発生の必然性をみていきたい。そして、第3章では、結果複合動詞の意味を概念構造で分解し、また、語彙概念構造と統語構造とのリンキング(linking)という概念から、後項動詞本来の主語が結果複合動詞の目的語になることを論じる。

2. 動詞意味における使役義

2.1 使役義と構成要素本来の意味

影山(1996:84)に、「達成動詞」(accomplishment verb)の説明において、「使役」について(14)のような論述がある。そして、McCawley(1971)の分析(15)を紹介している。

(14) 達成動詞... (中略) ...は、主語の何らかの行為によって、目的語の状態変化ないし位置変化が引き起こされることを意味する。この「引き起こす」という概念は通常、使役(causation)と呼ばれ...。(下線引用者)

(15) John killed the rat.

John CAUSED the rat to BECOME NOT ALIVE.

また、Levin & Rappaport Hovav (以下L&RHと略す。1995:83)では、使役交替(causative alternation)を論じる際に、breakを用いて(16)のような語彙の意味表現をしている。

(16) break: [[x DO-SOMETHING] CAUSE [y BECOME BROKEN]] (下線引用者)

以上の論述でわかるように、使役(CAUSE)が連携するのは、ある行為とその行為によって発生した状態変化である。つまり、ある対象に及ぶ行為や動作が発生するとき、その対象に何らかの変化が含意される場合に限って使役他動詞になるが、変化が含意されない場合は単なる働きかけの他動詞になる。使役他動詞は、変化の有無という点で、働きかけ他動詞と対照されて研究されてきた。ここでは、変化する前の段階、つまり「変化を引き起こす」ものに注意を払って考察していく。影山(1996:84)での「行為」と、L&RH(1995:83)での「DO-SOMETHING」は、意識的にコントロールできる動作主(Agent)をとる動詞だと考えられる。このような動作主動詞は、変化を含意しない場合は単純な行為を表す動詞であるが、変化を含意する場合は動作と変化の間に自然に使役義が生じる。言い換えれば、「変化を引き起こす」意味を表すには、動作主の「行為」が必要だということになる。この一連のことは(17)のような「行為連鎖」(action chain)⁸⁾と呼ばれている。

(17) <行為> CAUSE → <変化>

結果複合動詞は、原因を表す前項動詞と結果を表す後項動詞からなるものである、という定義に基づけば、後項動詞で表す結果事象は原因事象によって発生するため、何らかの変化や動きが起きているといえる。したがって、この変化・動きを引き起こす原因である前項動詞は、

行為や動作を表す動詞でなければならないという予測が成り立つ。つまり、中国語の結果複合動詞も(17)の行為連鎖にしたがうはずである。これについて、以下では王(2004b)の結果複合動詞における下位分類に基づき検証していきたい⁹⁾。

ア．共通参与者型

- ・自動詞 + 自動詞 自動詞

(18) a. 小明**跑累**了。(小明は走り疲れた)

E1: 小明**跑**(小明が走る)

E2: 小明**累**(小明が疲れる)¹⁰⁾

- ・自動詞 + 他動詞 他動詞

(19) 他**玩忘**了自己的職責。(彼は遊んでて自分の責任を忘れてしまった)

E1: 他**玩**(彼が遊ぶ)

E2: 他**忘**了自己的職責(彼が自分の責任を忘れる)

- ・他動詞 + 自動詞 他動詞

(20) 張三**打死**了蚊子。(張三が蚊を叩いて、蚊が死んだ)

E1: 張三**打**蚊子(張三が蚊を叩く)

E2: 蚊子**死**(蚊が死ぬ)

イ．独立事象結合型

- ・自動詞 + 自動詞 他動詞

(21) 黛玉**哭走**了客人。(黛玉が泣いて客が去っていった)(=7a)

E1: 黛玉**哭**(黛玉が泣く)

E2: 客人**走**(客が去る)

(18) ~ (21) の例では、原因を表す前項動詞「跑」(走る)、「玩」(遊ぶ)、「打」(叩く)、「哭」(泣く)は、すべて動作主を取る活動動詞だと思われる。これは(22)のように「拼命(地)」(一生懸命)のような副詞で修飾することができることで証明される。

(22) a. 小明**拼命(地)跑**(小明が一生懸命走る)

b. 他**拼命(地)玩**(彼が一生懸命遊ぶ)

c. 張三**拼命(地)打**蚊子(張三が一生懸命蚊を叩く)

d. 黛玉**拼命(地)哭**(黛玉が一生懸命泣く)

もし使役義が、行為を表す動詞の意味の存在によるものであるというならば、これらの例を見る限り、確かに中国語の結果複合動詞の使役義は、前項動詞の活動によって発生したもののよ

うに見える。しかし、次の例をみたい。

(23) a. 孩子**凍病**了。(子どもが凍えて病気になった)

E1: 孩子**凍**(子どもが凍える)

E2: 孩子**病**(子どもが病気になる)

b. 小美**累哭**了。(小美が疲れて泣いた)

E1: 小美**累**(小美が疲れる)

E2: 小美**哭**(小美が泣く)

(24) a. *孩子**拼命(地)凍**(子どもが一生懸命凍える)

b. *小美**拼命(地)累**(小美が一生懸命疲れる)

(23)の前項動詞「凍」(凍える)、「累」(疲れる)は、(24)のように「拼命(地)」「(一生懸命)」に修飾されないため、動作主を取る活動動詞ではないとわかる。これらの動詞は、活動動詞でないにもかかわらず、後項動詞が表す結果事象を引き起こし、原因を表す前項要素として結果複合動詞を構成することができる。これは前述した<行為> <変化>の行為連鎖に反している。また、このような例の存在は、使役義が行為から生じることへの反論となりうる。つまり、使役義を構成要素本来の意味から求めるのは必ずしも妥当ではないといえる。

また、影山(2001:36)によると、意味構造の視点から見れば talk、play、laugh などの非能格動詞は<行為>を表す動詞であり、<行為>は行為連鎖の左端にあるため、その左にさらに<行為>を付け加えて一語の動詞として表現することはできないという。つまり、語彙レベルでは状態変化の使役化が可能であるが、行為の使役化は容認されない。<行為> <行為>のような意味構造を表現する場合、統語的使役 (make や have) が必要となる。

(25) a. 小美**累哭**了(小美が疲れて泣いた)(=23b)

E2: 小美**哭**(小美が泣く)

b. 哥哥**逗笑**了弟弟。(兄さんが弟をあやして、弟が笑った)(=7b, 13a)

E2: 弟弟**笑**(弟が笑う)

しかし、(25)の結果事象が<行為>を表す非能格動詞である「哭」(泣く)、「笑」(笑う)であるにもかかわらず、左側にその結果の原因を表す動詞「累」(疲れる)、「逗」(あやす)が加えられた。変化を意味しない非能格動詞であっても結果複合動詞の後項要素、つまり結果事象を表す後項動詞として成立する例は、再び<行為> <変化>の行為連鎖に反している。また、変化を示す複合動詞の後項動詞として、本来は変化という意味を含まない非能格動詞の存在は、複合動詞全体の意味を構成要素の元の意味そのものからは求め得ないということの例証になる。

これまでの考察で、構成要素の元の意味から複合動詞全体の意味を捉えるのには限界があることが明らかになった。つまり、結果複合動詞の意味には、構成要素には本来含まれてない「使役」がある。また、原因事象から結果事象への推移により発生する「変化」という意味も、場合によっては、構成要素が合成された時点で生じた（例 25）ものである。このように、構成要素本来の意味と、結果複合動詞の成立による意味とのギャップを、構成要素ばかりに立ち返って求めてもあまり意味がないであろう。したがって、次節では視点を変え、動詞を表す意味の基本型という観点から、結果複合動詞の位置づけを探ってみる。

2.2 語彙的事象構造の基本型

Rappaport Hovav & Levin (以下 R.H&L と略す。1996, 1998)によれば、動詞には語彙的意味の基本型 (lexical semantic template) があり、これらの基本的な意味パターンは、可能な事象構造を定めるものとしている。そして、Vendler (1967)、Dowty (1979) などが提案したアスペクトによる動詞の分類に従い、(26) のように符号化し、語彙的事象構造の基本型 (lexical event structure template) を提示している。つまり、一つの語として機能する動詞には、(26) のようなパターンの意味構造があるということになる。

- | | |
|---|--------------------|
| (26) a. [x ACT <MANNER>] | (activity) |
| b. [x <STATE>] | (state) |
| c. [BECOME [x <STATE>]] | (achievement) |
| d. [[x ACT <MANNER>] CAUSE [BECOME [y <STATE>]]] | (accomplishment) |
| e. [x CAUSE [BECOME [y <STATE>]]] | (accomplishment) |
- (R.H&L (1998:108) より)

activity は行動、state は静止状態、achievement は状態変化であり、accomplishment は行動だけでなく、結果状態までの達成が含まれている。前の三つの型は単一事象を表すが、最後の accomplishment は二つの下位事象からなる複合事象である。この(26)の動詞意味の基本パターンでは、複数事象を表しているのは accomplishment のみであり、その複数の下位事象は CAUSE という意味述語 (semantic predicate) でつながっている。言い換えると、二つの下位事象を一つの語として表すのは、CAUSE による関係づけのみであるということになる。

上述の普遍性をふまえて、中国語動詞の語彙的意味を考えてみたい。英語と日本語では、二つの下位事象を表す単一動詞では、使役変化動詞と作成動詞がよく見られる。

- (27) a. John **killed** Mary. = Mary was dead.
 b. 太郎は花子を**殺した**。 = 花子が死んだ。

- (28) a. 張三殺了李四。(張三が李四を殺した)
b. 張三殺了李四, 但李四沒死。
(張三が李四を殺そうとしたが、李四は死ななかつた)

よく知られる例で、英語「kill」と日本語「殺す」は、動作だけでなく、動作対象の状態変化まで意味している。つまり、一つの語に動作と状態変化と二つの事象が含まれているということである。それに対し、中国語では(28a)の文だけでは、李四が必ずしも死んだわけではない。つまり、張三は「殺す」という動作をしたが、その動作によって李四が死んだという結果状態に至ることが保証されてない。従って、(28b)の表現が可能である。

また、使役用法と起動用法をもつ能格動詞からみれば、使役用法の能格動詞は、下位事象を二つ持っている使役変化動詞である。第一章で紹介したが、すでに数多くの研究から明らかのように、単音節の能格動詞の使役用法は、古代漢語にあっても現代中国語では残されておらず、単独で使うことはほとんどない。つまり、(29)のような動詞を表す事象は、現代中国語では状態変化だけであり、状態変化に至る前の段階を含めて表す場合、(29c)のように別の動詞を加える必要がある(王 2004a: 231-232)。なお、(30)の「開」(開く、開ける)は、現代中国語における動作から変化結果までの二つの事象を表す単一動詞におけるまれな例の一つと思われる。

- (29) a. *風倒了樹(風が木を倒した)
b. 樹倒了(木が倒れた)
c. 風吹倒了樹(風が木を倒した)
(30) a. 小明開了門(小明がドアを開けた)
b. 門開了(ドアが開いた)

次に作成動詞を見る。結果を表す名詞が要求される作成動詞は、動作のみならず動作の完了までに至る動詞である。すなわち、<動作>と<変化・結果>の複数の下位事象を含む動詞である。

- (31) a. John **built** a house in a month.
b. 太郎は1ヶ月でビルを**建てた**。
c. *小明一個月之内**蓋**了房子。
c' 小明一個月之内**蓋好**了房子。

この(31)でわかるように、同じ客観事象を表す「built」「建てる」「蓋」は、英語と日本語は時限表現(「in a month」「1ヶ月で」「一個月之内」と共起できるが、中国語はできない。中国語で完了までを表現したい場合、(31c')のように「完」「好」「到」「光」などの「動相標誌」

(phase marker) ¹¹⁾が必要である。

(32) a. I **baked** a cake.

b. 私はケーキを**焼いた**。

(33) a. 我**烤**了蛋糕。(ケーキを焼いた)

b. 我**烤好**了蛋糕。(ケーキを焼き上げた)

同じく、(32)の英語と日本語に対照する中国語(33a)では、「ケーキをオーブンに入れて、スイッチオンした」ということ動作は発生しているが、ケーキがもう焼きあがっているということも可能であるし、まだ焼いている最中であることも可能である。もし「ケーキが焼きあがった」というように、出来上がった状態までを表す場合、(33b)のように動相標誌の「好」を必要とする。

以上の考察でわかるように、二つの事象が単一動詞で表される場合、英語と日本語では少なくとも使役変化動詞と作成動詞が見られる。しかし、現代中国語では、動作のみ(例 33a)あるいは状態変化だけ(例 29b)のような単独事象を表す動詞はあるが、二つの事象を合わせて単一動詞で表す例はあまりない。複数の事象を表す場合、動相標誌(例 31 c', 33b)や別の動詞(例 29c)を加えたりしなければならないのである。したがって、(26)のような動詞の意味構造が基本的なパターンならば、現代中国語の単一動詞の意味においては、CAUSEによって下位事象がつながるといふ事象構造が欠けているといえる。それゆえ、現代中国語における結果複合動詞の成立のしくみは、まさに動詞の意味構造という普遍理論を補う面を持っている¹²⁾。

3. 結果複合動詞の語彙概念構造

3.1 語彙概念構造

2.2 節で見てきたように、二つの下位事象からなる動詞では、その下位事象の間に生じるのは CAUSE のみであるとわかった。そして、このように CAUSE で下位事象を連携する単一動詞が欠けている現代中国語では、因果関係を表す複合動詞がその役目を果たしている。さてそれでは、このような結果複合動詞を形成するには、どのような下位事象が可能になるのかという問題が持ち上がる。理論的には、結果複合動詞を構成する下位事象は、(26)での単一事象であれば可能になる。つまり、単一事象を表す状態動詞、活動動詞、到達動詞の全てが可能である。したがって、構成要素に見られない状態動詞を除き、(34)の組み合わせが予想される。

- (34) a. [activity] CAUSE [activity]
b. [activity] CAUSE [achievement]
c. [achievement] CAUSE [achievement]
d. [achievement] CAUSE [activity]

(34) を実例に照らしてみると、(35) ~ (37) の例がある。しかし、(34d) パターンの例は、現時点で見つからない。

- (35) [activity] CAUSE [activity]
a. 哥哥**逗笑**了弟弟。(兄さんが弟をあやして、弟が笑った)
a' [x ACT-ON y_i] CAUSE [x_i ACT]
b. 黛玉**哭走**了客人。(黛玉が泣いて客が去っていった)
b' [x_i ACT] CAUSE [x_j ACT]
c. 黛玉**气哭**了。(黛玉が怒って泣き出した)
c' [x_i ACT] CAUSE [x_i ACT]
- (36) [activity] CAUSE [achievement]
a. 小明**打死**了蚊子。(小明は蚊を叩いて、蚊が死んだ)
a' [x ACT-ON y_i] CAUSE [BECOME [X_i DEAD]]
b. 他**跑丢**了一隻鞋。(彼は走って片っ方の靴をなくしてしまった)
b' [x_i ACT] CAUSE [BECOME [x_j LOST]]
c. 小明**跑累**了。(小明は走り疲れた)
c' [x_i ACT] CAUSE [BECOME [x_i TIRED]]
- (37) [achievement] CAUSE [achievement]
a. 孩子**冻病**了。(子どもが凍えて病気になった)
a' [BECOME [x_i FREEZE]] CAUSE [BECOME [x_i SICK]]

ここで、もう一度結果複合動詞の定義に遡りたい。結果複合動詞とは、前項動詞の原因が後項動詞の結果と組み合わせられてできたもので、前項動詞を表す事象の発生によって後項動詞を表すある変化が起きたり動作を動き出したりするものである。この定義をふまえて、結果複合動詞の意味を分解すると、二つの事象をつなぐ「CAUSE」と変化を表す「BECOME」という少なくとも二つのキーワードが必要である。ところが、語彙概念構造が動詞の意味内容を把握するものであるならば、(35)の語彙概念構造は結果複合動詞全体の意味を伝えていない恐れがある。つまり、(35)で示した結果複合動詞の語彙概念構造は、構成要素本来の語彙概念から形成されたものであるが、結果複合動詞を生成したために生じた「変化や動き出す」という意味が

表現されていない。従って、結果複合動詞の語彙概念を忠実に伝えるには、(35)のような例は(38)のように修正されなければならないと思われる。

(38) [activity] CAUSE [achievement]

- a. 哥哥**逗笑**了弟弟。(兄さんが弟をあやして、弟が笑った)
- a' [x ACT-ON y] CAUSE [BECOME [y LAUGH]]
- b. 黛玉**哭走**了客人。(黛玉が泣いて客が去っていった)
- b' [x ACT] CAUSE [BECOME [y AWAY]]
- c. 黛玉**气哭**了。(黛玉が怒って泣き出した)
- c' [x_i ACT] CAUSE [BECOME [y_i CRY]]

つまり、前項動詞と後項動詞が共に活動動詞の場合、構成要素の立場から見れば、(35)のような[activity] CAUSE [activity]という構造になるが、結果複合動詞全体が表す意味内容から見れば、(38) [activity] CAUSE [achievement]という構造の方がふさわしいと考えられる。このようにして、後項動詞本来が変化の意味を持つ(36)と(37)と合わせて、結果複合動詞の語彙概念構造は(39)のように絞ることができる。

(39) a. [activity] CAUSE [achievement]

b. [achievement] CAUSE [achievement]

3.2 項構造へのリンク

L&R.H (1995:83)によれば、breakのような CAUSE で二つの下位事象をつなぐ動詞は、二つの項を持っている。使役項(causer argument)は CAUSE 前の事象に関わり、影響を受ける参加者は CAUSE の後ろの事象に関わり、その意味役割は常に patient あるいは theme である。つまり、break という行為と変化を含む動詞では、動作する項 x は行為事象[DO-SOMETHING]に関わり、変化する項 y は変化事象[BECOME BROKEN]に関わるということになる。

(40) break: [[x DO-SOMETHING] CAUSE [y BECOME BROKEN]] (= 16)

また、影山(1996:92)では「概念構造を左から右への流れを見なすと、外項は左端から、内項は右端から選ばれる」というように、概念構造と項構造を結び付けている¹³⁾。このリンクルールを中国語の結果複合動詞に照らしてみると、次のようになるであろう。すなわち、使役を引き起こす原因事象の主語は複合動詞全体の外項になり、変化が起きる結果事象の主語は複合動詞全体の内項になる、ということである。

(41) [原因事象] CAUSE [結果事象]

a. [activity] CAUSE [achievement]

= [x ACT] CAUSE [BECOME [y _____]]
 (外項) (内項)

b. [achievement] CAUSE [achievement]

= [BECOME [x _____]] CAUSE [BECOME [y _____]]
 (外項) (内項)

以下、具体例を見てみよう。

(42) a. 小明**打死**了蚊子。(小明は蚊を叩いて、蚊が死んだ)(= 36a)

同 定

a' [x ACT-ON y_i] CAUSE [BECOME [y_i DEAD]]
 (小明) (蚊子) (蚊子)

b. 他**跑丢**了一隻鞋。(彼は走ってて片っ方の靴をなくしてしまった)(= 36b)

b' [x ACT] CAUSE [BECOME [y LOST]]
 (他) (一隻鞋)

(42a) では、原因事象は「小明が蚊に対して動作をする」であり、結果事象は「蚊が小明の動きによって死んだ」である。原因事象の行為が及ぶ対象は、結果事象が述べるものでもあり、両者は同じ指示対象で同定することができる(以下、語彙概念構造で項を表す x と y に i を付したものは、同一の指示対象であることを表す) 複合動詞全体の内項にあたる。また、(42b) では、概念構造から見れば、原因事象の主語(他)は外項を担い、結果事象の主語(一隻鞋)が内項を担っている。これらは、リンキングルールに従っている。

(43) a. 哥哥**逗笑**了弟弟。(兄さんが弟をあやして、弟が笑った)(= 38a)

a' [x ACT-ON y_i] CAUSE [BECOME [y_i LAUGH]]
 (哥哥) (弟弟) (弟弟)

b. 黛玉**哭走**了客人。(黛玉が泣いて客が去っていった)(= 38b)

b' [x ACT] CAUSE [BECOME [y AWAY]]
 (黛玉) (客人)

(43) のように後項動詞本来が非能格動詞であっても、項構造について(42)と同様な解釈ができる。このように、語彙概念構造で結果複合動詞の意味内容を把握することで、後項動詞が非

対格動詞であれ非能格動詞であれ、その主語が複合動詞全体の目的語になることを説明できる。

しかし、結果複合動詞は必ずしも(42)(43)のような他動詞ではなく、(44)(45)のような自動詞になることもある。

- (44) a. 小明**跑累**了。(小明は走り疲れた)(=37c)
 a' [x_i ACT] CAUSE [BECOME [y_i *TIRE*D]]
 (小明) (小明)
- b. 黛玉**氣哭**了。(黛玉が怒って泣き出した)(=39c)
 b' [x_i ACT] CAUSE [BECOME [y_i *CRY*]]
 (黛玉) (黛玉)
- (45) a. 孩子**凍病**了。(子どもが凍えて病気になった)(=38a)
 a' [BECOME [x_i *FREEZE*]] CAUSE [BECOME [y_i *SICK*]]
 (孩子) (孩子)

この場合、もともと内項を担う結果事象の主語は、原因事象の単一項とは同一指示物であり、同定することができ、複合動詞全体が自動詞になる。興味深いのは、(44)(45)の結果複合自動詞は(46)のような他動詞用法もあることである。これは既に王(2004b)で論じられている。このような他動用法はどのような語彙概念構造で説明できるのであろうか。

- (46) a. [馬拉松] **跑累**了小明 (マラソンは小明を走り疲れさせた)(cf.44a)
 b. [寶玉] **氣哭**了黛玉 (寶玉が黛玉を怒らせて、泣かせた)(cf.44b)
 c. [張三] **凍病**了孩子 (張三は子どもを凍えさせて病気にさせた)(cf.45a)

前述した R.H&L (1996) では、動詞の意味拡張は(26)のような事象構造の基本型に従って行われるという。つまり、動詞意味の拡張は事象構造の拡張である。そして、拡張する際、事象構造と統語構造の関係に次のような条件を設けている。

(47) **Argument Realization:**

- a. There must be at least one argument XP in the syntax per subevent in the event structure template.
- b. Each argument XP in the syntax must be associated with an identified subevent in the event structure template. (R.H&L (1996:380) より)

つまり、一つの下位事象には少なくとも一つの統語項がある。また、統語構造での項は必ず

事象構造の下位事象と連結する。言い換えると、下位事象の数は容認される項の数である。動詞の意味が単一事象であれば、項は一つであり、動詞の意味が二つの事象からなるのならば、項は二つまで容認される。(44)(45)の複合動詞が原因と結果という二つの下位事象からなるものであれば、理論的には二つの項が必要とされる。しかし、前述したように二つの下位事象の主語が同定されたため、統語的に項は一つしか表れていない。すると、残された項の位置に、新たな名詞句をいれることができると考えられよう。つまり、共に単一項を持つ二つの下位事象は、項と項の同定が発生することで、新たな名詞を加える権利が与えられるということである。また、新たに加える名詞句は恣意的なものではなく、(44)(45)で表す事象の CAUSER のみである。つまり、「小明**跑累了**」「黛玉**氣哭了**」「孩子**凍病了**」というような、既に複数の下位事象が含まれている複合動詞に対し、更にこの複合事象を結果としてもたらす原因のみが許されるということである。この場合、元来の複合事象の主語「小明」「黛玉」「孩子」は、新たな原因の追加によって、結果事象の主語になり、新しい文の内項になる。

(48) a. [馬拉松] **跑累了**小明。(マラソンは小明を走り疲れさせた)(= 46a)

a' x CAUSE {[x_i ACT] CAUSE [BECOME [y_i TIRED]]}
 (馬拉松) (小明) (小明)

b. [寶玉] **氣哭了**黛玉。(寶玉が黛玉を怒らせて泣き出させた)(= 46b)

b' x CAUSE {[x_i ACT] CAUSE [BECOME [y_i CRY]]}
 (寶玉) (黛玉) (黛玉)

(49) a. [張三] **凍病了**孩子。(張三は子どもを凍えさせて、病気にさせた)(= 46c)

a' x CAUSE {[BECOME [x_i FREEZE]] CAUSE [BECOME [y_i SICK]]}
 (張三) (孩子) (孩子)

4. おわりに

本稿では現代中国語の結果複合動詞の形成について考察した。結果複合動詞の意味内容を追求するには、その構成要素の本来の意味構造から探ることには限界があるとわかった。そして、結果複合動詞を語彙概念構造によって分解することで、後項動詞が非対格動詞であれ非能格動詞であれ、その主語が複合動詞全体の目的語になることを説明することができた。

<注>

- 1) 結果複合動詞の後項要素には、動詞と形容詞があるが、中国語においては、動詞と形容詞が通用することが多いため、本稿では、後項要素が動詞であるか形容詞であるかを問わず、すべて後項動詞と呼ぶ。
- 2) 湯(1990)では「使動・及物」「及物」「不及物」「兼語」を括弧で表しているが、本稿では、わかりやすくするために太字で表示する。また、湯(1990)の原文は中国語であり、分類の用語はそのまま引用する。なお、「及物」動詞は他動詞に、「不及物」動詞は自動詞に相当する。「兼語及物動詞」とは pivotal

transitive verb である。

- 3) 湯 (1990:160) でいう「述補式複合動詞」は、前項の述語動詞が行動や変化を、後項の補語動詞が行動や変化の結果を表すことが多いという点で、本稿の「結果複合動詞」に一致する。ただし、湯 (1990) では、「他看完了信」(彼は手紙を読み終わった) のような「動詞+動相標誌 (phase marker)」も含める点で、本稿よりも研究対象が広いと思われる。なお、「他看完了信」のような文では、動作が及ぶ対象 (信) や動作主自体 (他) が動作によって変化したり新たな動きをしたりすることがないため、「動詞+動相標誌」については本稿では研究対象から除外する。「動相標誌」については注 11 を参照。
- 4) 古代能格動詞の使用法が現代中国語に残っているものに「開」がある。詳細は第 2.2 節を参照。なお、古代漢語の用法については、王力 (1954)、太田 (1958)、湯 (1990、1991) などを参照。
- 5) Ve は使用法を持つ能格動詞 (ergative verb) を意味する。
- 6) (7b) と (7c) の後項要素「笑」と「哭 (泣く)」は、それぞれ自動詞と他動詞の用法を持っているが、「哥哥笑弟弟」(兄が弟をからかう) と「孝女哭慈母」(娘が母親の死に泣く) はそれぞれ「弟弟笑」(弟が笑う) と「慈母哭」(母親が泣く) を含まず、能格動詞ではなく一つの動詞の異なる用法である。
- 7) 引用先の石村 (2000) では簡体字なので、本文ではそのまま引用する。以下同じ。
- 8) 行為連鎖については、Croft (1991, 1998)、Langacker (1991)、影山 (1996, 2000, 2002) を参照。
- 9) 王 (2004b) では、結果複合動詞について構成要素が表す事象の合成をボトムアップの方向から考察した。前項動詞と後項動詞の結合は、それぞれが表す事象と事象の関わり方によって、「共通参与者型」と「独立事象結合型」に分けられる。そして、共通参与者型に「他動詞+他動詞 他動詞」という類があり、「吃膩」(食べ飽きる)「住慣」(住み慣れる)などを結果複合動詞と見なした。しかし「吃膩」は「飽きたのは食べたから」、「住慣」は「慣れたのは住んだから」をパラフレーズすることができないため、構成要素の間での因果関係が明確ではない。本稿では因果関係が明確なもののみを考察し、「他動詞+他動詞 他動詞」という結果複合動詞は、ひとまず考察対象から除外する。
- 10) E1 と E2 はそれぞれ前項動詞と後項動詞で表す事象を意味する。E1 は原因事象、E2 は結果事象である。
- 11) 中国語の「動相標誌」は動作の到達、完成、処置などを表し、動詞の虚化から来たものである。また「動貌標誌」(aspect marker) には「了、著、過」がある。(黄 (1983)、湯 (1990、1991) を参照)
- 12) 似たもので、結果複合動詞と中国語動詞の結果の達成を含意しない性質との関係を論じたものに、荒川 (1982:83) がある。また、湯 (1991:110) では、単音節自動詞の使用法 (能格用法) は、現代中国語ではほとんどなくなったが、その代わりに能格動詞を補語とする述補式使動動詞ができたとする。
- 13) 影山 (1996:92) では次のように述べている。

「概念構造と項構造の結び付け

外項規則：上位事象の主語が外項になる。

内項規則：下位事象がある場合は BE の主語が、また、下位事象がない場合は ACTION の対象が、内項になる。」

なお、影山の「上位事象」は本稿の「前項事象」に、「下位事象」は本稿の「後項事象」に相当する。また、本稿の「下位事象」は、「前項事象」も「後項事象」も指すが、影山の「下位事象」とは異なることに注意されたい。

<参考文献>

- 秋山 淳 1998 「語彙概念構造と動補複合動詞」『中国語学』245
- 荒川清秀 1982 「中国語の語彙」『講座日本語学 12 外国語との対照』明治書院
- Croft, W. 1991 *Syntactic Categories and Grammatical Relations*, University of Chicago
- Croft, W. 1998 "Event Structure in Argument Linking", in Butt, M. & Geuder W. (eds) *The Projection of Arguments: Lexical and Compositional Factors*, CSLI, 21-63
- Dowty, D. 1979 *Word Meaning and Montague Grammar*. Reidel.
- 黄 宣範(訳) 1983 《漢語語法》文鶴出版 (Charles N. Li and Sandra A. Thompson. 1981. *Mandarin Chinese: A Functional Reference Grammar*, California University)
- 石村 広 1999 「現代中国語の結果構文 日英語との比較を通じて」『文化女子大学紀要・人文社

現代中国語の結果複合動詞形成 (王)

会科学研究』第7集

- 石村 広 2000 「中国語結果構文の意味構造とヴォイス」『中国語学』247
- 影山太郎 1996 『動詞意味論 言語と認知の接点』くろしお出版
- 影山太郎 2000 「自他交替の意味のメカニズム」丸山忠雄・須賀一好(編)『日英語の自他の交替』
ひつじ書房
- 影山太郎(編) 2001 『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店
- 影山太郎 2002 「非対格構造の他動詞 意味と統語のインターフェイス」伊藤たかね編『文法理論：
レキシコンと統語』東京大学出版会
- Langacker, R. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar, Vol.2: Descriptive Application*, Stanford University
- Levin, B. and M. Rappaport Hovav. 1995. *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*, Linguistic Inquiry Monograph 26, MIT Press.
- Li, Yafei. 1990. "On V-V Compounds in Chinese", *Natural Language and Linguistic Theory* 8, 177-207.
- McCawley, James D. 1971. "Prelexical Syntax", Report of the 22nd Annual Roundtable Meeting on Linguistics and Language Studies, 19-33, Georgetown University Press
- 望月圭子 1990a 「日・中両語の結果を表わす複合動詞」『東京外国語大学論集』40
- 望月圭子 1990b 「動補動詞の形成」『中国語学』237
- Rappaport Hovav, M. and B. Levin. 1996. "Two Types of Derived Accomplishments", in M. Butt and T.H. King, eds., *Proceedings of the First LFG Conference*, 375-388
- Rappaport Hovav, M. and B. Levin. 1998. "Building Verb Meanings", in Butt, M. & Geuder W. (eds) ,*The Projection of Arguments : Lexical and Compositional Factors*, CSLI, 97-134
- 柴谷方良 1982 「ヴォイス：中国語・英語」『講座日本語学 10 外国語との対照』明治書院
- 沈 力 1993 〈关于汉语结果复合动词中参项结构的问题〉《语文研究》第3期
- 太田辰夫 1958 『中国語歴史文法』江南書院(1981 朋友書院再版)
- 湯 廷池 1990 漢語語法的「併入現象」(湯廷池 1992a《漢語詞法句法三集》台灣學生書局.所収)
- 湯 廷池 1991 漢語述補式複合動詞の結構、功能與起源 (湯廷池 1992b《漢語詞法句法四集》台灣學生書局.所収)
- Vendler, Z. 1967. *Linguistics in Philosophy*. Cornell University Press
- 王 力 1954 《中国语法理论》上海中华书局
- 王 怡人 2004a 「現代中国語の軽動詞について “打”を中心に」『現代社会文化研究』29
新潟大学大学院現代社会文化研究科
- 王 怡人 2004b 「中国語の結果複合動詞について」『言語文化研究』10 新潟大学
- 山口直人 1991 「動補動詞の類型と形成について」『中国語学』238

主指導教員(大石強教授) 副指導教員(舩城俊太郎教授・佐藤徹郎教授)